

### 3. 他都市等との比較

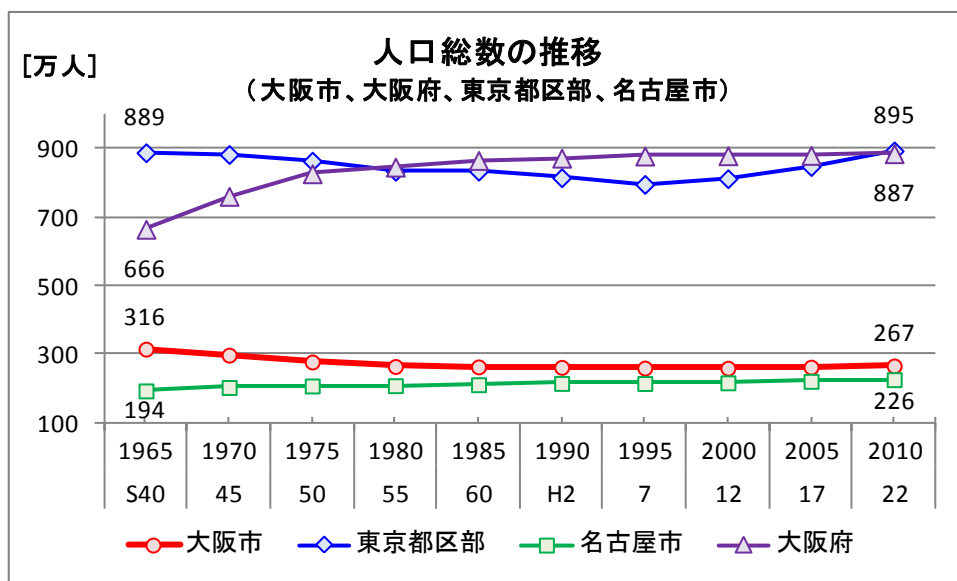
#### (1) 人口の推移

##### ①人口総数

##### ★都市人口の郊外化から都心回帰の兆候か

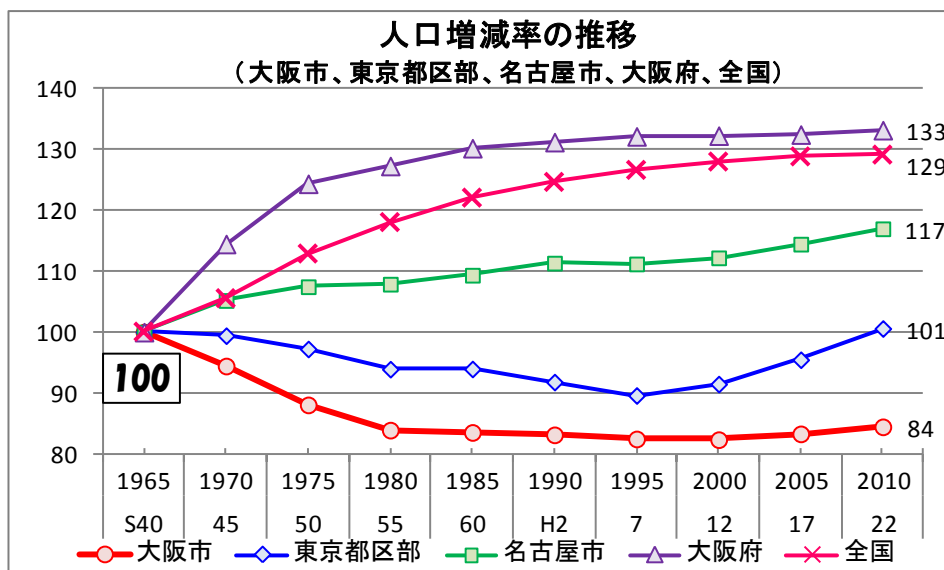
1965年の人口を100として、人口増減率の推移をみると、東京都区部では1965年から1995年にかけて低下したが、2000年以降は上昇しており、2010年では1965年の水準に回復している。名古屋市は1965年以降、ほぼ上昇傾向にあり、大阪市や東京都区部と異なった傾向が見られる。全国の動きは1965年以降急激に上昇したが、しだいに緩やかな上昇傾向となっている。

他都市等に比べて大阪市では1965年から急低下をみせ、2005年に上昇に転じたものの、いまだ1965年の水準には回復していない。



出典：総務省「国勢調査」

##### ■1965年を100とした場合の増減率の比較

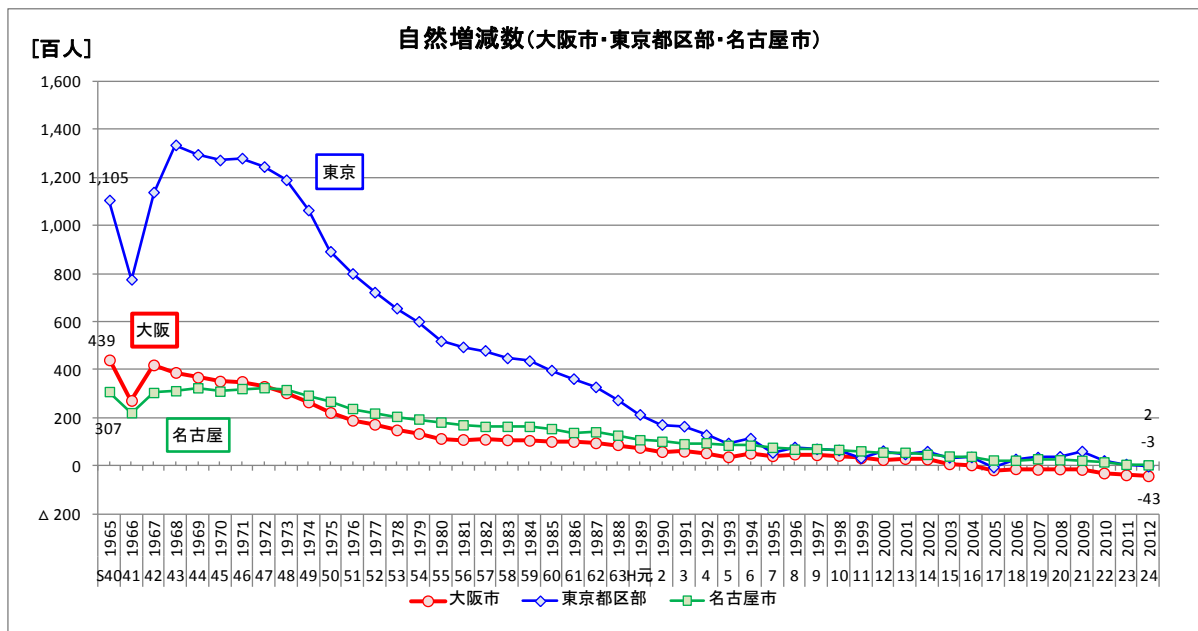


出典：総務省「国勢調査」

## ②自然増減（出生数－死亡数）

### ★3都市ともに減少傾向が続く

自然増減をみると、大阪市、東京都区部では2004年まで自然増加が続いていたが、2005年に自然減少に転じている。名古屋市は2012年現在まで自然増加が続いている。



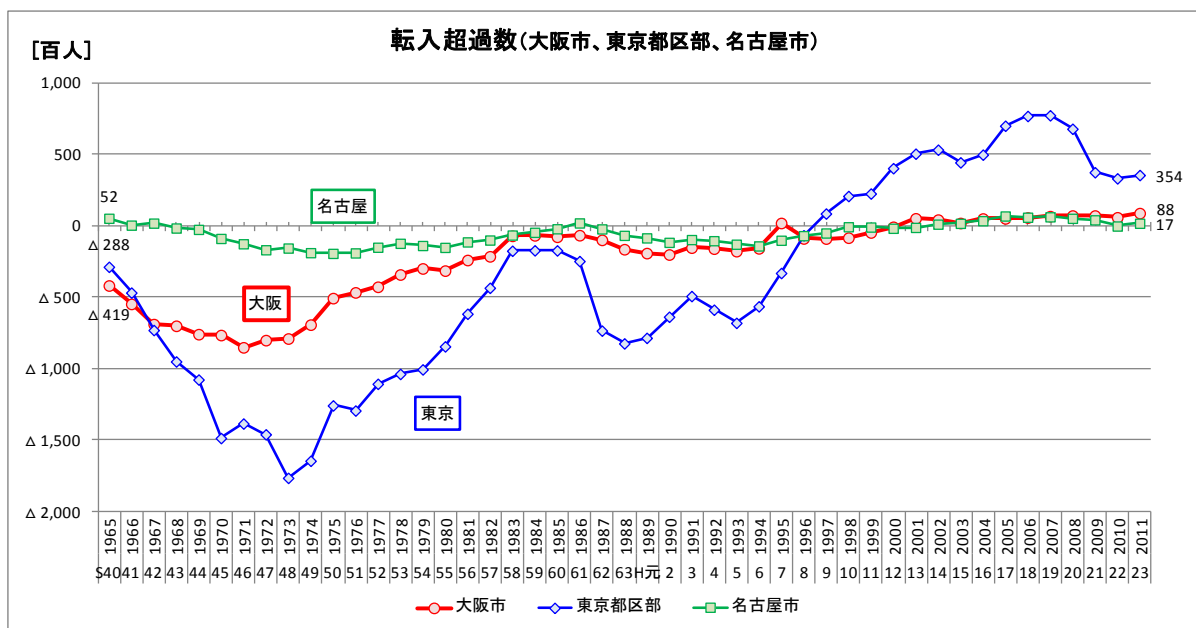
出典：大阪市都市計画局「推計人口」、東京都総務局「人口の動き」

## ③社会増減（転入数－転出数）

愛知県統計課「愛知県人口動向調査結果（名古屋市分）」

### ★3都市ともに直近10年は転入超過の傾向

社会増減をみると、大阪市、東京都区部では1965年から、名古屋市では1968年から転入超過が続いていたが、1997年に東京都区部で、2001年（1995年をのぞく）に大阪市で、2002年（1986年をのぞく）に名古屋市で転入超過に転じている。

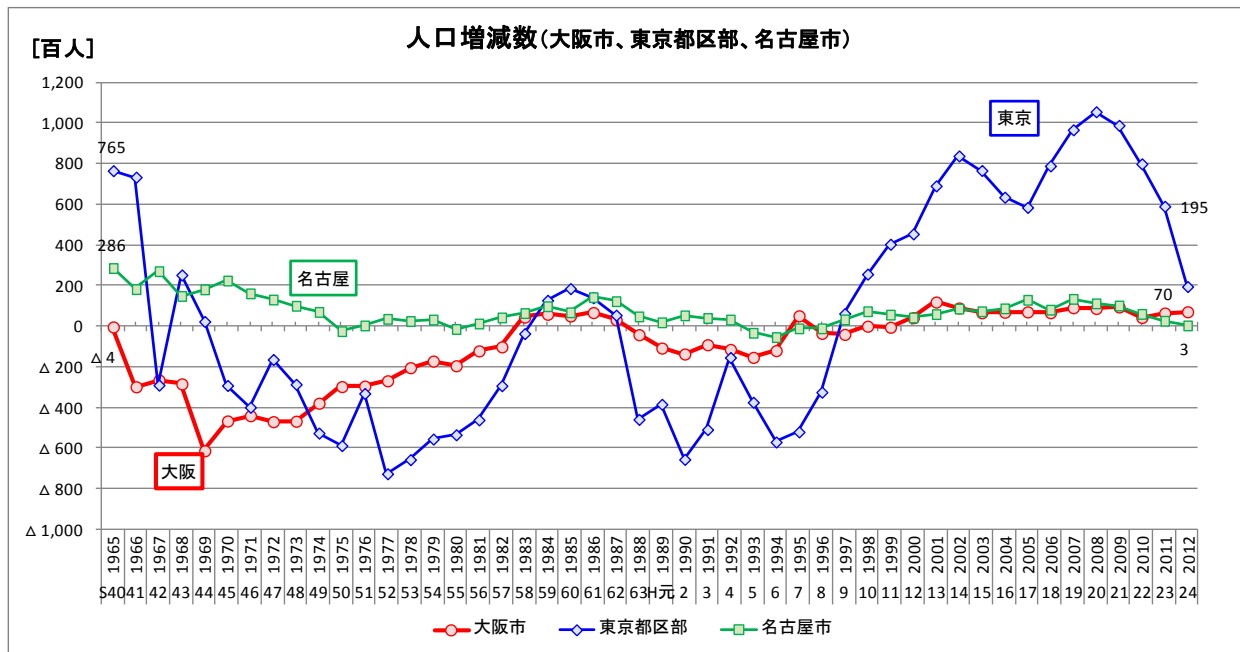


出典：総務省「住民基本台帳人口移動報告」

#### ④人口増減（自然増減+社会増減）

##### ★3都市ともに直近 10 年は人口増加の傾向

人口増減をみると、東京都区部では 1970 年から急速に人口減少が進み、1984 年、1985 年は一時的に増加となったが、再び減少になり、1997 年以降は増加となっている。一方、名古屋市では大阪市と東京都区部の動きと異なり、数年をのぞき人口増減を繰り返している。

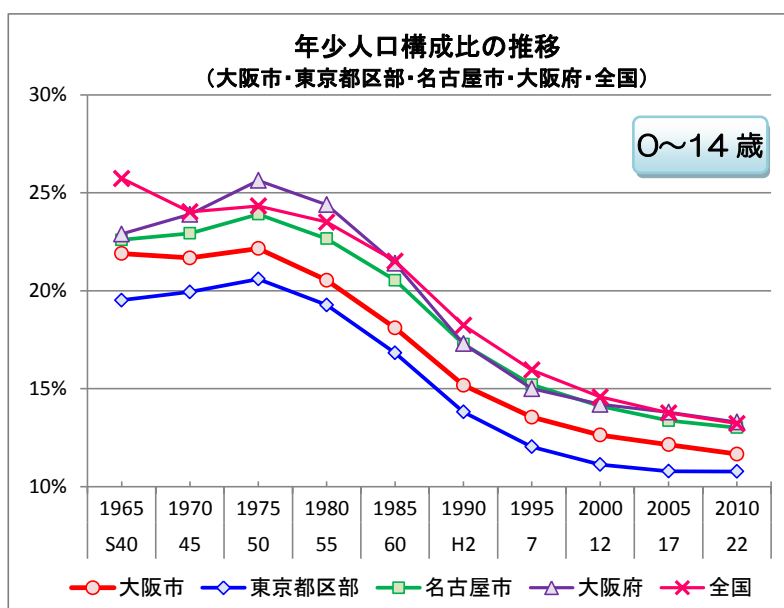


出典：大阪市都市計画局、名古屋市総務局、東京都総務局「推計人口」

#### ⑤年少人口の推移

##### ★東京より高いが、名古屋より低い

年少人口の構成比の推移をみると、全体的に同様に低下傾向になっており、大阪市は全国、大阪府、名古屋市と比較して低く、東京都区部より高い状態となっている。



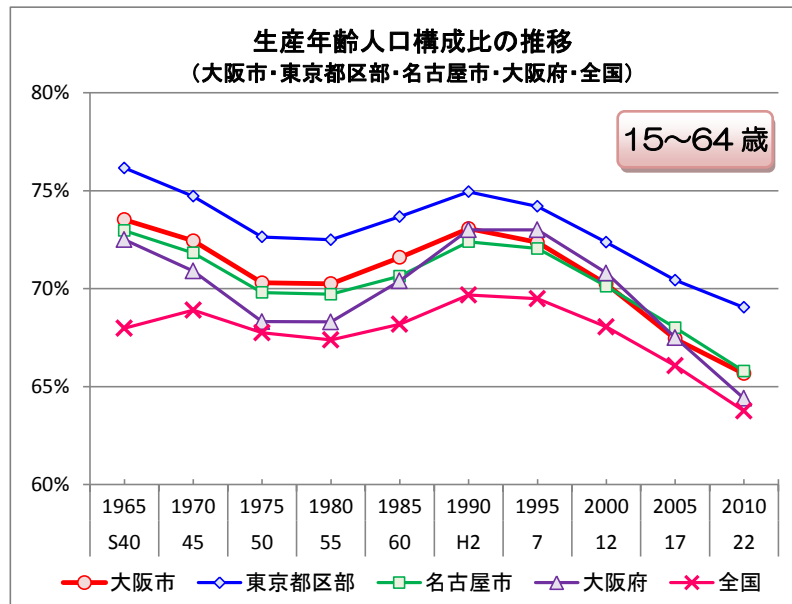
※年齢不詳は含まない。

出典：総務省「国勢調査」

## ⑥生産年齢人口の推移

### ★全国平均より高いが、東京より低い

生産年齢人口の構成比の推移をみると、大阪市は東京都区部と比較して低いが、全国と比較して高く、名古屋市とは近い値となっている。



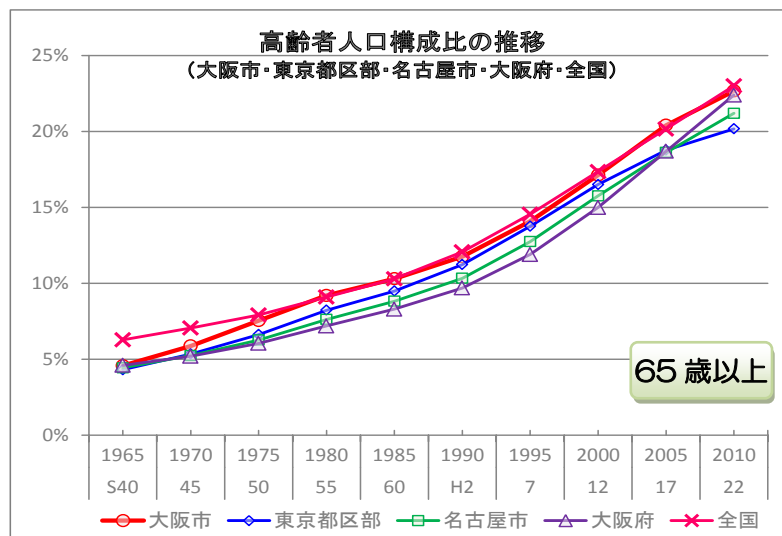
※年齢不詳は含まない。

出典：総務省「国勢調査」

## ⑦高齢者人口の推移

### ★他都市と同様に高齢化が進展

高齢者人口の構成比の推移をみると、大阪市は東京都区部や名古屋と比較して若干高くなっているが、全体的に同様の傾向となっている。



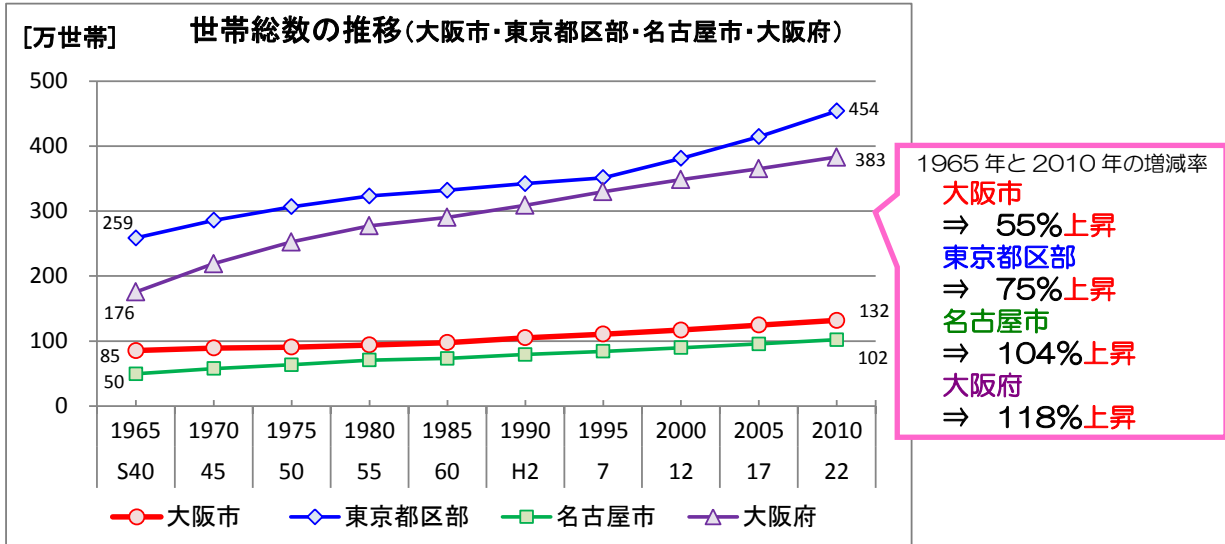
※年齢不詳は含まない。

出典：総務省「国勢調査」

## (2) 世帯数の推移

### ★他都市等とともに世帯数は増加

2010年の世帯数を1965年と比較すると、大阪市は55%増加し、また大阪府では他都市等の中で最も大きい上昇の118%増加となっている。



※世帯の種類「不詳」を含む。

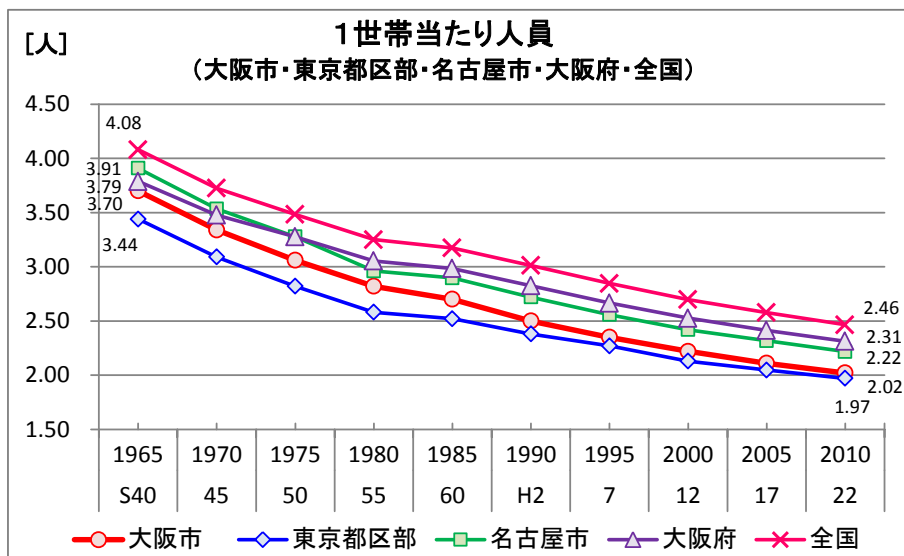
出典：総務省「国勢調査」

※昭和60年以降の国勢調査では、会社などの寮の単身の入寮者の世帯数はそれまで1棟1世帯であったのを1人1世帯として数えている。

### ★1世帯当たり人員は減少傾向

1世帯当たり人員の推移をみると、2010年では全国は2.46人となっており、大阪市、東京都区部、名古屋市、大阪府は全国より下回っている。

1世帯当たり人員が低い都市等は東京都区部で1.97人、次いで大阪市で2.02人となっている。

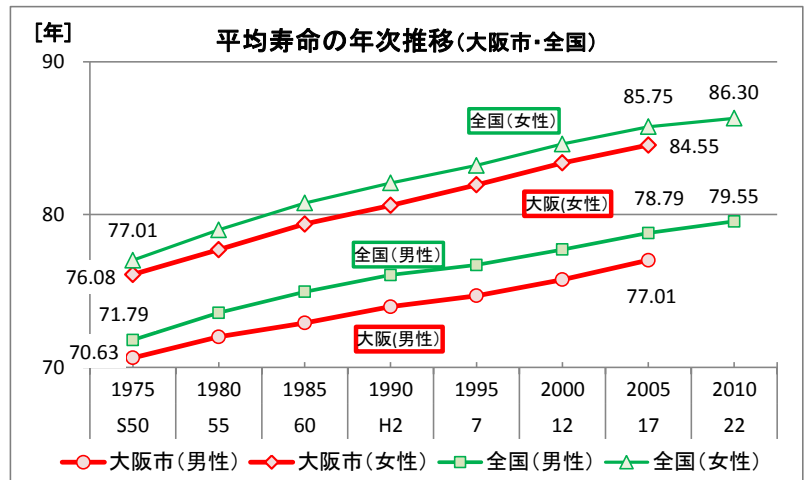


出典：総務省「国勢調査」

●○○ トピック ●○○ ～平均寿命、合計特殊出生率～

★平均寿命は全国より短い

大阪市と全国の男性、女性の平均寿命を比較してみると、1975年以降、常に下回っている。1975年では、男性が1.16年、女性が0.93年の差であったが、2005年では、男性が1.78年、女性が1.20年短くなり、1975年よりその差が広がっている。

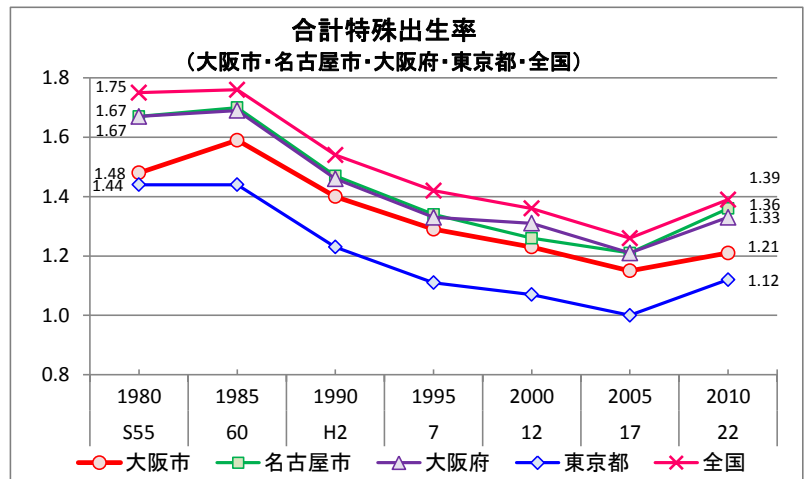


出典：厚生労働省「市町村別生命表」「完全生命表」「都道府県別生命表」

★合計特殊出生率は2010年は上昇に転じる

「人口動態調査」を国勢調査年ごとにみると、大阪市の合計特殊出生率は、1980年には1.48であったが、1985年に1.59と上昇し、それ以降低下が続いていた。2005年に1.15と底を打ち、2010年では1.21と上昇した。

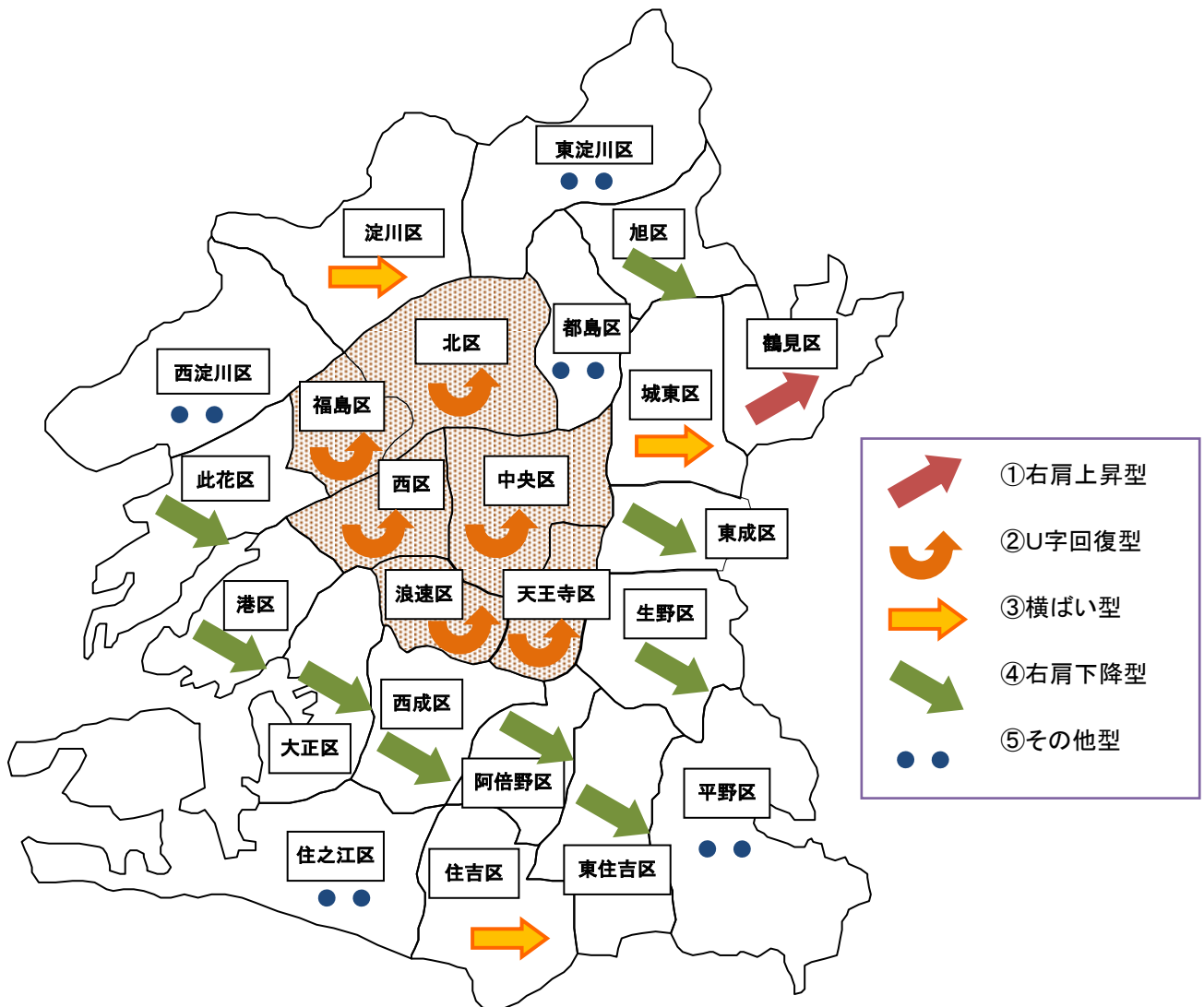
他都市等の合計特殊出生率は、1990年以降すべてで低下傾向にあったが、2005年に底をうち、2010年は上昇に転じた。特に東京都区部の数値が最も低く、2010年では1.12となっている。



出典：厚生労働省「人口動態調査」

※合計特殊出生率とは、一人の女性が一生に産む子どもの数。

★都心部で回復傾向、南部で減少が続く



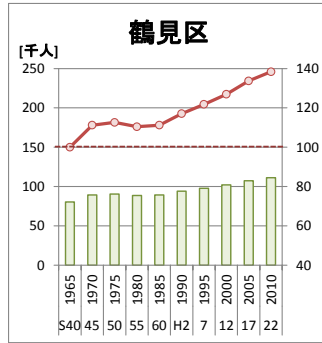
出典：総務省「国勢調査」

1965年から2010年までの区別の人口推移をみると、おおまかに5つの型に分類することができる。

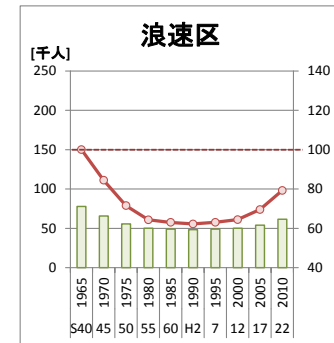
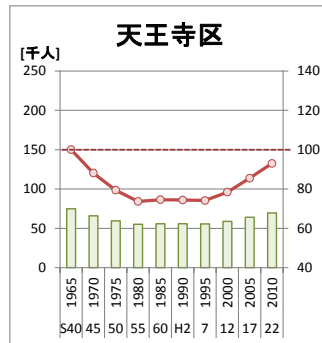
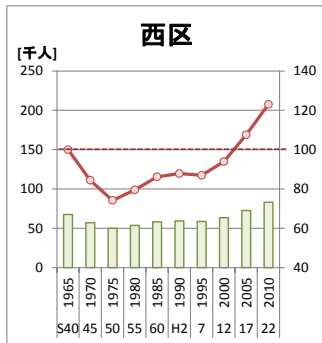
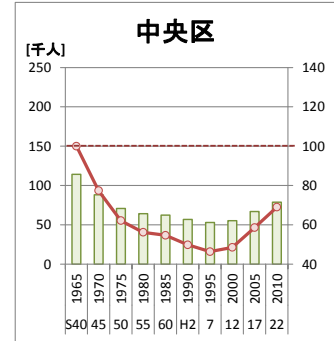
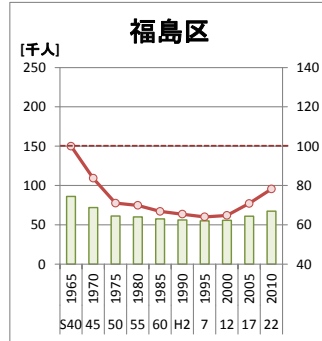
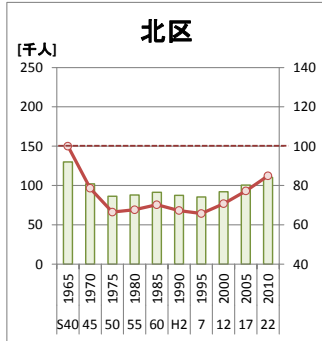
第1に多少の増減はありつつもほぼ一貫して人口が増加している区（右肩上昇型）、第2に1975年から1995年までを底として、その後は人口が回復してきている区（U字回復型）、第3に全期間を通じて、あまり変動がみられない区（横ばい型）、第4に全期間を通じて、一貫して減少傾向にある区（右肩下降型）、第5にいずれにもあてはまらない区（その他型）である。

上の図をみると、都心部の5区がすべてU字回復型となっており、都心部を中心に回復傾向にあるといえる。それに対して、南部では右肩下降型が多くみられ、減少が続いていることが分かる。

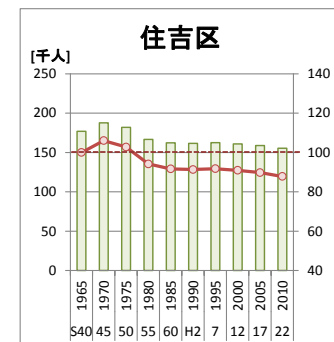
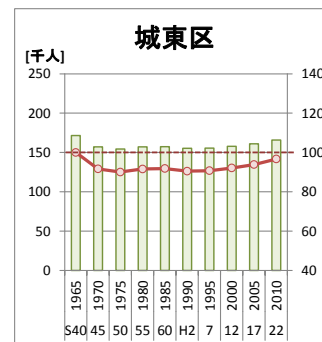
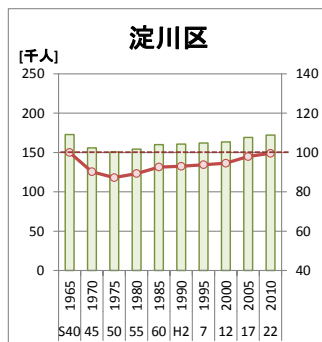
右肩上昇型



U型回復型

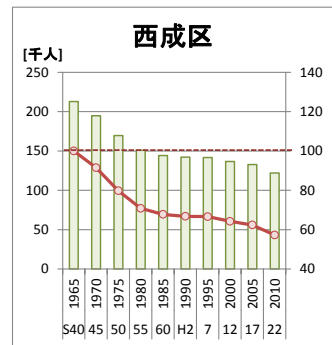
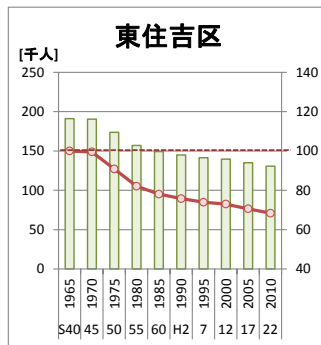
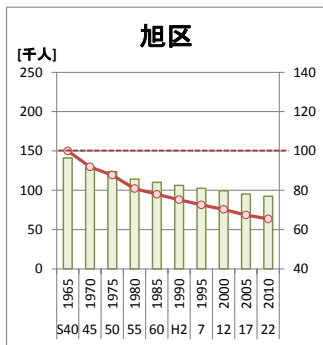
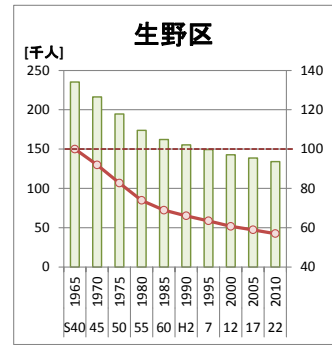
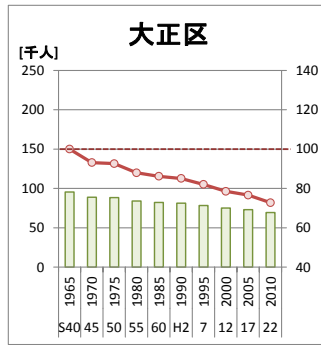
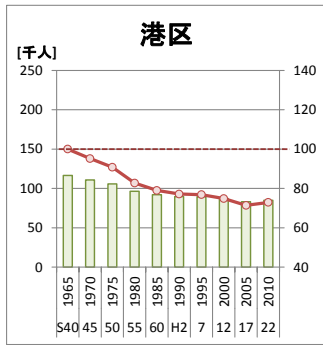
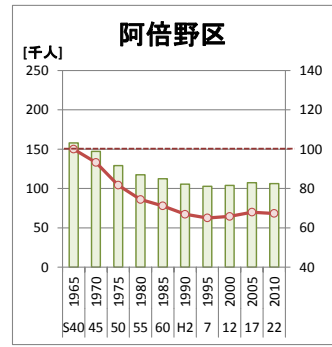
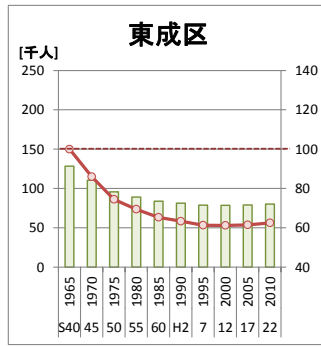
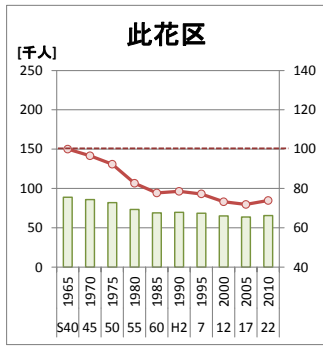


横ばい型





右肩下降型



その他型

